「神の国のたとえ」
マルコ４：２６-３４

平吹光太　２４.３.１０

本日はイエス様が２つのたとえを用いて、神の国の広がりにはどのような性質があるかについて語られている箇所になります。ここから主の御思いを教えて頂き、共に主に従って行きたい。

I.　神の国の成長は神の御業

「またイエスは言われた。『神の国はこのようなものです。人が地に種を蒔くと、夜昼、寝たり起きたりしているうちに種は芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。地はひとりでに実をならせ、初めに苗、次に穂、次に多くの実が穂にできます。実が熟すと、すぐに鎌を入れます。収穫の時が来たからです。』」（26-29）

「神の国」とは、神の支配する国のこと。神の国の完成は主の再臨の時に成就されますが、この世においても神の御心が成される所にはすでに神の国が始まっている。神を信じ従う者一人ひとりの心の中にあり、そこから広げられていく。

「種」とは、みことばのこと（14）。ここでイエス様は命のある種（命のみことば）が蒔かれることで、神のご支配が拡大していくことを述べられている。

人が畑で農作物を収穫するためには、まず種を蒔くこと。どんなに良い土、肥料、道具等を用意し、水をまき、草取りをしても、種を蒔かなければ何も育たない。つまり救いを願う人にどれだけ良いと思えることを言ったりしてあげたとしても神のみことばが語られなければ、救いの実を見ることはできない。種を蒔くこと（みことばを宣べ伝える）は先に救われた者の使命です。私たちもみことばを伝えられて、救いに預かったように、私たちがみことばを宣べ伝えることで、さらに神の国が広げられていく。もちろん土壌を良くすること、つまり救いを願う人に対して、良い関係を築くことは良いこと。みことばを伝えやすくなる。しかし何よりもみことばの種を蒔くことが大切。

また、日々私たちの心という畑にも種を蒔くことが大切。教会で語られるメッセージ、日毎のデボーションでのみことばを自分のこととして真剣に聞き、生活に適用すること。そうするならば、神のみことばに生きる私たちを通して、神の国のご支配が拡大していく。

「夜昼、寝たり起きたりしているうちに」（27）とは、人がみことばと関わる中で神の国が成長していく時間の流れを指している。夜昼と書かれており、昼夜ではないことに注目したい。これは当時のユダヤ人の一日は夕べから始まることを表している。先に休み、憩いという恵みを得てから労働に出るというあり方は幸いです。安息日もイエス様の復活された日曜日となり、週の初めとされていることも、まず主の前に休み、憩いを十分に得て働きに出る。私たちは、教会の奉仕だけではなく、家庭、職場、学校、どこの場での働きにおいてもまず、主の恵みに満たされ、その恵みの応答としての働きであることをいつも覚えたい。

「どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。地はひとりでに実をならせ、初めに苗、次に穂、次に多くの実が穂にできます。」（27-28）とある。これは、神の国が拡大するため、私たちにできることはみことばの種を蒔き、水や雑草を抜いたりすること位で、芽を出させ、成長させるのは神の御業であるということ。

神の国の成長（人の救い、福音が広まっていくこと）は神の力であるということです。そうであるなら、私たちは何もしなくて良いということではなく、私たちに神が与えられた分、使命があります。それは、人々の救いのために祈り、愛を示し、関係作りをし、福音を伝えること。福音を伝えることに関してもイエス様は一方的に話されたのではなく彼らの聞く力に応じてみことばを語られました。

「イエスは、このような多くのたとえをもって、彼らの聞く力に応じてみことばを話された。たとえを使わずに話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちには、彼らだけがいるときに、すべてのことを解き明かされた。」（33-34）

私たちも見習いたい。子どもには子ども、大人には大人、その人その人の理解力に応じて語ることが大切。自己満足的に語るのではなく相手に分かりやすく伝えることをイエス様から教えられます。
しかし福音の働きに関わる中で、人が救われたり教会に人が沢山来るとき私たちは決して勘違いをしてはいけない。神の国の福音が広げられていくのは神の力であり、私たちの力ではないことをこの箇所は述べている。協力できることはほんの少しのことにすぎない。しかし神は私たちに大切な働きをお与えくださり、そのことを通して、私たちがさらに神を知り神を信頼して委ねるということを教えてくださる。そして、私たちの領分であるみことばの種を蒔き続け、祈り、愛を持って関わり続けるなら、主の時に救いの実、成長を共に喜ぶ時が来る。私たちは焦らずに神に委ねて生きることが大切。
そして、救われた私たちにとっては、毎日のこととして、みことばを読み、今日の成すべきことを祈り、夜には恵みを数え、罪を告白して十字架の前に悔い改め赦しを頂き、過ごす。この習慣を通しても主は私たちを主の似姿へと変え続けてくださいます。つまり御霊の実を結ぶ者とさせてくださる。**「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。」（ガラテヤ 5:22-23）**どんな時（良いときも悪いと思う時も）もみことば、祈り、教会生活を大切にする中で御霊の実が実り、主の似姿へと成長させてくださる恵みに預からせて頂けることに感謝。
「実が熟すと、すぐに鎌を入れます。収穫の時が来たからです。」（29）
ここは救いの完成と裁きについて述べられている。

II. 主の力、みことばに力に信頼する
「またイエスは言われた。『神の国はどのようにたとえたらよいでしょうか。どんなたとえで説明できるでしょうか。それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときは、地の上のどんな種よりも小さいのですが、蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張って、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。』」（30-32）
ここはもう一つのたとえ。イエス様は神の国はからし種のようなものと言われた。からし種は当時の中東諸国では最も小さい種として知られていたもの。そのからし種は植えられて育つと樹となって成長し、３、４メートル程の大きさになる。イエス様が神の国を一粒のからし種のようなものにたとえられたのは、からし種のような最も小さな種にどのようなことが起こりどう変化するのかを伝えるため。つまり神の国は人間の考えでは計り知ることのできない程の成長が秘められているということ。
事実、福音の種は小さなからし種程でした。最初はイエス様が１２弟子を集めるところから始まります。１２弟子を見ても特別に立派であったり学識や財力があったわけでもなく普通の人たち。むしろ短気な者や裏切る者も現れたりと弱い者たち。まさに小さなからし種のような始まり。しかし、この小さなからし種のような働きを通してみことばの福音が広められ、イスラエルの１２人の弟子から今では全世界に主を信じるクリスチャンが起こされ、各国に教会が建て上げられています。そのように小さなからし種が現在では全世界を覆う程の大木となっている。これはまさしく人間の力ではなく、神の力によるものでしかありません。これは私たちにとって励まし。神は私たちの弱さを十分知った上で私たちを召しておられる。
パウロは自身の弱さをこのように告白している。**「その啓示のすばらしさのため高慢にならないように、私は肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高慢にならないように、私を打つためのサタンの使いです。この使いについて、私から去らせてくださるようにと、私は三度、主に願いました。しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」（Ⅱコリ 12:7-10）**パウロは自分自身の弱さが、完全に取り去られるようにと３度も主に祈り願った。この弱ささえなければもっと神のために役立つことができたのにと考えて祈った。

しかし、それでも神はその弱さを彼から取り去られなかった。むしろ神はその弱さを「**わたしの恵みはあなたに十分であり、わたしの力は弱さのうちに完全に現れる**」と言われた。私たちも、主から与えられている身体、能力、性格、また他の全てにおいても、弱さを感じたり、不十分だと感じる時があったとしても、主の力により頼んで進む時、その弱さも強さと変えられ実を結ぶ者と用いられていく。
私たちの働きは小さいように思えるかもしれない。しかし私たちは常に自分ではなく、主の力、みことばに力があることを覚え、信頼していく者であり続けたい。私たちに委ねられている小さな種蒔き（毎日みことばの種を自分自身の心に蒔き、養われ、そして人々の救いのために祈り、愛を示し、福音の種を蒔くこと）を、忠実にへりくだって主にお仕えするならば、主は主の時に、神の国が教会、家族、友人、知人において、成長する時がやがて来る事を信じ希望を持って歩んでまいりましょう。